

大人の階段



18禁

PARALLEL ACT

人間の条件

TomOne 文 ロンゲ魔人K イラスト

目次

第1章	5
第2章	10
第3章	15
第4章	25
あとがき	29

あらすじ

3

はやてはリンを解放するために、グラムに処女を捧げる。

4

後日談。

注意!! これは頒布促進用のあらすじです。当然ネタバレですので、本編をじっくりと読みたい方は、このページを読まないでください。

なお、微妙に本編と違う所がありますが、ご了承ください。

1

はやてが中学を卒業するお祝いに、グラムとリーゼが八神邸を訪問。グラムは過去の事件を謝罪する。

2

リーゼがはやてを手籠めにする。その間、グラムはリンフォースIIに毒牙を伸ばす。

第1章

1

『グレアムおじさんこんにちは。中等部の卒業式まで、もう十日を切りました。これで義務教育も終了です。今まで長い間援助してくださって、どうもありがとうございます。た。中学を卒業したら……』

「父様、はやてからの手紙？」

「ああ、もうすぐ中学を卒業だそうだ。あれから六年、早いものだな」

椅子に深々と腰掛け、眼鏡をかけた老人がエアメールを読んでいる。その隣には、孫だろつか、若い娘が二人寄り添って立っている。ただ、その風貌は奇妙で、頭には猫のような耳が、腰にはしっぽが生えている。そう、グレアムとリーゼアリアの二人がはやてからのエアメールを読んでいた。

「はやて、大きくなったね」

「ああ」

二人は同封された写真を眺める。そこには、はやてとその「家族」の写真が写っていた。はやてが中心で、その回りを守護騎士が囲んでいる。車椅子はもう無い。足は何年も前にすっかり完治していた。

「会ってお礼がしたいか…… そろそろ食べ頃かな……」
グレアムの目が潤む。

「ふむ…… うふう……」

机の下から、なにやらおかしな声が聞こえる。

「おおう……」

グレアムが声を漏らす。

「んっ…… ふっ……」

ジュルル…… ごくん……

「はあ…… 父様、はやてからの手紙が来ると大きくなるんだもん。口が疲れちゃったわ」

リーゼロッテがグレアムの股の間から顔を出し、抗議する。

「すまなかつたロッテ。上がっておいで」

「はあい♡ 父様、あたしにもはやてからの手紙見せてよ」

「父様、次はあたしね」

リーゼロッテが机の下から這い出てくると、替わりにリーゼアリアが机の下に潜る。そして、グレアムのズボンの

チャックから出ている物にしゃぶりついた。

2

ピンポーン。

「はい」

卒業式を明日に控え、はやての気分は浮かれている。玄関のチャイムに反応する声も軽やかだ。今、八神家にははやてと、リインフォースⅡの二人しかない。守護騎士ゴオルケンリッターの皆は、全員任務に出かけている。明日がはやての卒業式だと言うことは時空管理局も分かっている。夜には帰ってくる予定だ。何の問題も起こらなければ。

「どちらさまですか？ あ……」

玄関のドアを開けると、そこには珍しい人が立っていた。いや、来訪するのは初めてだから、「珍しい」と言うのも違うかも知れない。

「こんにちは。会ったのは初めてかな」

「グレアムおじさん……」

グレアムの突然の来訪に、驚いて声が出ない。

「はい、はやて。リーゼとして会ったのは初めてかな？」

「……」

うっかり口を滑らせたリーゼアリアを、リーゼロツテが

小突く。なのはやフェイトに変身していた時にはやてに会ったことはあるが、変身していない時に会ったのは初めてだ。そして、仮面の騎士としてはやてや守護騎士を襲っていたことは、はやては知らないはずだった。

「あ、とにかく上がってください」

「ありがとう。お邪魔させて貰うよ」

「あ、靴は脱いでください」

「それくらい日本の風習は知っているよ」

「はやて、ナイスボケ！ あ痛!!」

リーゼロツテはリーゼアリアを、今度は力一杯叩く。不足の事態においても、ボケと突っ込みは忘れてはいけないうた。

「誰か来たですか？ あ……」

はやてがグレアム達を応接間に案内していると、リインがひよつこりと顔を出した。リインは八神家にいる時は、小学生タイプになって暮らしている。掌サイズも好きだが、普通の人間の大きさの方が暮らしやすいし、色々遊べて楽しい。

そんなリインが、グレアム達の姿を確認すると顔が曇った。人見知りと言うよりは、初めから良くない印象を持つ

ているようだ。

「どうぞ。紅茶の方が良かったですか？」

「はやては、グレアム達に玉露を出した。出した後に「イギリス人なら紅茶の方が良かったかも知れない」と思いつく。

「いや、構わんよ」

「そう言つて、口を付けると、思わず顔をしかめる。

「砂糖はないのかな」

「砂糖、ですか？ 普通緑茶に砂糖は入れんのやけど……」

「はやては、ある人物を思い出して苦笑する。

「そうなのか、いつもリンディ提督が入っていたし、店でも砂糖が入っているから、てっきり日本でも入れる物だと思つていたよ」

「そうなんですか。なら、角砂糖を持ってきます」

「いや、構わんよ。それよりも早く本題に入ろう」

「そう言つて、グレアムは姿勢を正す。はやても做^{なら}つて座つた。そして、グレアムは懐から封筒を取り出す。

「いつもの、生活費だ」

「あ、ありがとうございます。いつもいつも、グレアムおじさんには感謝してます」

「最後は、郵便や振り込みじゃなく、手渡したくてね」

「最後……？」

「義務教育卒業おめでとう。これから、管理局で本格的に働くのだから？」

「はい」

「だからもう、金銭的援助は必要ないだろう。これではやて君も独り立ちだ」

「ありがとうございます」

「金銭面で言つと、既に時空管理局からの給料があるので全然困つていない。それでもはやては、両親が亡くなつてから今までの長い年月を思い出し、涙が溢れてきた。

「ほんまグレアムおじさんには感謝してます。両親が亡くなつて、不自由なく暮らせて来れたのも、守護騎士や、なのはちゃん達にも遇えて、今こうして暮らしてられるのも、みんなグレアムおじさんのお陰とします」

「そんなに感謝しなくても良い。私にとっては、辛い目に遭わせてきた事の罪滅ぼしなのだから」

「罪滅ぼし？」

「そうして、グレアムは六年前の闇の書事件、いや、その前回・十七年前の闇の書事件から話し始めた。

「済まなかった。闇の書を封印するために君達を利用し、辛い目に遭わせた。そして君達を永久氷結しようとした。本当に済まなかった」

そう言って、グレアムは深く頭を下げた。

「……頭を上げてください」

はやては暫く黙っていたが、穏やかな表情でグレアムに声をかけた。

「ようやく、言うてくれましたね」

「何!？」

これには、グレアムも驚いた。

「知って、いたのか？」

「はい。私を誰だと思つてます？ 時空管理局特別捜査官

ですよ。事件ファイルには目を通してます」

はやてはにっこりと微笑んだ。

「私を、恨んでいるだろう……」

「とんでもない。感謝してます。さっき言ったように、今

の私があるのはグレアムおじさんのお陰ですから」

「そうか、ありがとう……」

そう言って、グレアムは涙を流しながらはやての手を強く握った。

「手を離すです!!」

はやてとグレアムがリインに振り向く。リインはソファア

から立ち上がり、拳を握りしめ、怒りに震えていた。

「マイスターはやて!! こいつの所為でリインフォースお

姉さまは消滅したし、はやても殺そうとしたですよ! こ

んな奴許しちゃ駄目です!!」

「リイン!! そういう風に言ったらあかん! グレアムおじさんは、グレアムおじさんなりに最善の方法を採ろうとしたし、私達の恩人なんよ!」

リインははやてに叱られ、悔しくて涙が出てきた。

「……リイン、お茶のお代わり持って来るです……」

そう言って、リインは応接間から出て行った。

「済みません、リインが失礼なことを…… 後でよく言うて聞かせますから……」

「いや、構わんよ。当然の反応だ。むしろ詰なつてくれた方が心苦しくない」

「そうですか……」

「さて、はやて君」

グレアムは、ソファアに座り直した。

「私は、君を大人にするのが最後の仕事だと思ってきた」

「そんな、最後だなんて。グレアムおじさんはまだ若いんですから」

はやては、今のグレアムの少しおかしな言い回しに気づ

かなかった。

「はは、そう言ってくれるとありがたい。でもやはり若い

には勝てなくてね。いきなりだと立たなくなってしまうてるんだよ」

「はい？」

グレアムの変な言葉に、はやては首をかしげる。すると、はやての後ろから、リーゼロッテの腕が伸びる。いつの間後ろに回ったのか。

「きゃー！」

「はやて、胸小さいだろ。大きくなりたいと思わない？」

「何!？」

そう言っ、リーゼロッテがはやての胸を揉む。息が耳にかかる。

「な、何するんですか!？」

はやてが抗議する。今まで胸はヴィータに揉ませてあげただけ。赤の他人に揉まれたことはない。

「ちよつと!」

はやてがじたばたすると、リーゼアリアが結界を張る動作に気づく。これでこの場所は外の世界から隔絶された。グレアムの方を見ると、穏やかに自分達を見つめている。

「グレアムおじさん!」

「リーゼに身を任せると良い。彼女らは上手いよ」

「!？」

リーゼロッテの左腕がはやての服をたくし上げ、そのま

まはやての胸をブラ越しに揉み始める。右手がはやての太股をさする。

「い、嫌あつ!」

「そんなに拒否しないでよ。悲しいじゃない」

撫で回す右手が、ゆっくりとタイトスカートの内側にまで入ってきた。

第2章

1

「ぐすん……」
台所で、リインフォースIIがポッドから湯飲みに湯を注いでいる。

「はやてちゃんは どうしてあんな奴の肩を持つんです……」
事件ファイルをはやてと一緒に見た時から、グラムには怒りを覚えていた。リインフォースは自ら消滅を選択せざるを得なかったし、何よりはやてを殺そう。正確には氷結だが、とした事が許せなかった。それでいて自分は大した罰も受けずに、悠々自適に暮らしている事が許せなかった。幾らはやてに金銭的援助をしようとも、ただの偽善にしか思えなかった。

お湯を注ぎ終わると、盆を持って応接間に戻ろうとする。その瞬間、辺りの空間が異様な雰囲気包まれた。

「結果!? それも アンチマジックフィールド AMF!? はやてちゃん!!」

リインは辺りを見回すと、盆を放り投げて応接間に向かう。

ガチャ！ ガチャリ！

「どうして!？」

応接間のドアが開かない。家の中なので鍵なんて付いていない。しかし、まるで鍵を閉めたようにドアが開かなくなっていた。

「はやてちゃん！ はやてちゃん!!」

リインは必死にドアを叩いたり、ドアノブを引いたりする。しかし、全然開かない。家を包む結界と共に、応接間にも結界が張られ、二重結界となっていた。

「こうなったら魔法で…… あ、AMFに閉じこめられた時の対処法、まだ教わってなかったです!」

AMF内での対処法は、高度なのでまだ教わっていない。例え教わっていても、今のリインの実力ではどうしようもないのだろう。

「はやてちゃん!!」

バン!!

不意に結界が解かれ、ドアが開いた。リインは勢いを止められず、応接間の中に転んだ。

「!?」

ラインは、その場の異様な光景に目を見張った。

リーゼの二人がはやてに絡み合っている。服は脱がされ、床に落ち、腕にブラが絡まっている。リーゼアリアははやての左耳を噛み、はやての左の胸を揉んでいる。リーゼロツテは、はやての右胸にしゃぶりつき、右手ははやてのたくし上げられたスカートの中をさすっている。本来スカートの中にあるべき白い布は、左膝に絡まっている。

はやての表情は虚ろで、どこを見ているか分からない。そして、リーゼの口や手が動く度に、はやての身体もビクと痙攣していた。僅かだが、ぴちゃぴちゃと水の音もする。

「な、何してるですか……?」

「ライン…… 見ないで…… 見たらあかん……」

はやてがぼそぼそと呟く。腕を持ち上げて隠そうとするが、力が入らないのと、リーゼに邪魔されて動かない。

「はやて君は、大人への階段を登っているのだよ」

グレアムがラインの方を見る。

「大人への、階段……?」

ラインは首を傾げる。

「ライン君も早く大人になりたいだろ」

「大人…… には、成りたいですけど……」

ラインの脳裏に、ラインフォースの事が浮かんだ。大人には成りたい。でも、何かが違う。

「そうか、なら」

そう言っ、グレアムはラインの身体を掴み、ひよいと自分の膝の上に載せる。老いたとは言っても、体格の良い男性。小学生程度の大きさしかないラインを軽々と扱う。

「ライン君も大人にしてやるぞ」

そう言っ、グレアムはラインの首筋を嘗めると同時に、右手を股の間に滑り込ませた。

「ひあっ!」

ラインが思わず声を上げる。グレアムは構わず舌による愛撫を続け、ラインのパンツをさする。布越しからラインの突起を見つけ、ゆっくりと擦る。

「や、止めるです! き、気持ち悪いです!」

ラインはグレアムから逃れようと身体をくねらす、左腕でがっしりと抱えられているので、身動きが出来ない。

「そんなに嫌がらなくていい。直にはやて君と同様に気持ち良く感じるようになってくる」

「はやてちゃんと……」

ラインははやての方を見る。はやては顔を紅潮させ、呼

吸は荒く、意識も虚ろなようだ。

「はやてちゃん、苦しそうです……」

「そんな事はない。快感に意識が飛んでいるだけだよ。君も直に分かる」

「ひゃ!?!」

グレアムの右手の動きが激しく、鋭くなる。リインの身体がビクビクと痙攣する。

「や、止め!」

「ほら、段々と湿ってきた。感じてきた証拠だ」

「湿る?」

グレアムはリインのパンツを横にずらすと、人差し指と中指で、リインの小陰唇を直接撫で、幼いながらも滲んでいる愛液を掬う。そして指をリインの目の前に持ってきた。

「ほら、これが君の大事な所から出てきたのだ。感じている証拠だよ」

「おしっこ?」

まだ知識の乏しいリインには、大事な所から出てくる液体は尿しか知らない。

「違う。おしっこはこんなにネバネバしてないだろう」

そう言っつて、リインの愛液でテカっている人差し指と中指を離したり、くっつけたりして、その粘性を見せる。

「もっと感じると、はやて君のようじゅんじゅん出てくるよ。」

「リーゼ」

「はい、父様」

リーゼロツテははやての中に入れていた指を一旦引き抜き、グレアムとリインに見せた。指だけでなく、掌全体までテカっている。

「はやては凄いねえ。止まらないよ」

そう言っつて、リーゼロツテは自分の手に付いている愛液をしゃぶる。

「はやてちゃん……」

リインが主の様子に驚いている間、グレアムはリインの服の前をはだけさせる。胸の膨らみは全くなく、乳首も小さく可愛らしい。グレアムは、乳首を指の腹で撫でる。

そして身体を浮かせると、リインのパンツを掴んで脱がせた。今度は、布越しではなく、直接リインのクリトリスや小陰唇を刺激する。

「ひい、い、あ……」

「ほら、はやて君のように、段々と気持ちよくなってきただろう」

リインはグレアムの腕を掴んで止めようとするが、力が入らない。もっとも、例え力が入っても、グレアムに敵うわけではない。

グレアムはズボンのベルトを外し、チャックを開け、自

分の一物を取り出す。その上にリインを座らせ、リインの腰を前後に動かす。いわゆる素股の格好になる。

「どうだい？ 気持ち良いかい？」

「そんなこと、ないです……」

リインの肌の色が、最初の頃よりも赤みを増している。感じている証拠だ。グレアムは乳首やクリトリスへの刺激を続け、それに応答するようにリインの身体も痙攣する。

「さて……」

グレアムはリインの身体を持ち上げる。そして、自分のペニスを手に持って固定すると、ゆっくりとリインの身体を下ろしていく。リインの膣口と亀頭が触れる。リインの身体が少し震えたが、特に様子の変化はない。

「むう……」

グレアムは左手の力をさらに緩めた。リインの身体がさらに沈む。その時……

「ぎゃ〜！ 痛い〜！！ 痛いです〜！」

リインの叫びが部屋に響く。じたばたと身体を動かして逃げようとする。しかし、グレアムが押さえているので、離れられない。

「ここから、暴れてないで力を緩めるんだ。でないと入らないではないか」

「痛い痛い痛いです〜！！」

3

白い靄がかかっている。全身がげだるく、力が入らない。感覚も無く、宙に浮いている感じた。何か呟いているが、自分でも何を言っているのか分からない。

「……」

遠くから何かが聞こえる。

「痛い、痛いです……」

段々と音として、声として認識してきた。

「痛いです！！ 助けてはやってちゃん！」

「リイン!？」

はやは、自分の娘とも言えるリインの悲鳴だと認識した途端意識が戻った。そして、現在の状況に喫驚する。

自分は全裸にされ、胸を揉まれ、肌に唇が這い、局部の中で指が蠢いている。自分の中に何かを入れた経験など無かった。最後の状況の認識には時間がかかった。

さらに驚いたのはリインの状況だった。服をただけさせられたリインをグレアムが抱え、そそり立った彼の一物が、リインの股間を支点にして身体を支えている。グレアムがリインの身体を揺らして沈めようとしているが、リインの

小さく狭く閉じられた膣口は、グレアムのペニスを頑かたくに拒んでいた。

「はやてちゃん、助けて… 痛い、痛いです!」

はやての意識が戻った事に気づいたリインは、はやてに助けを求めて手を伸ばす。

「な、なんやねん! これは!」

「おや、はやて君。もっとリーゼ達を楽しんでいても良かったのに」

「グレアムおじさん、説明して下さい!」

「なに、はやて君だけでなく、リイン君も大人にしてあげようと思ってるね。君だけ大人になるのも不公平だろう」

「な!」

はやては、驚きの余り開いた口がふさがらない。その間も、リインの悲鳴は続く。

「グレアムおじさん、お願いです。止めてください…… リインが…… リインが……」

「そうは言ってもね、まだリイン君を大人にしてやっていない」

「リインはまだ小さいんです。大人になるにはまだ早いです。私が… 私が大人になるだけで十分です。リインの代わりに私を大人にして下さい」

はやては、泣きながらグレアムに訴える。

「そうか、仕方ないな。はやて君だけでも大人にすることにしよう」

そう言つて、グレアムは左手の動きを止め、力を緩めた。
「ぎゃっ!!」

その瞬間、リインは短く鋭い悲鳴を上げ、硬直した。次にぐったりと項垂うなだれる。外からは、グレアムのペニスがかつきりと見えているままだが、先端が少しだけ隠れている。ほんの少しだけ入ったのだろうか？

「リイン!」

はやては思わず叫んで、リインの下もとに寄ろうとするが、リーゼに身体を押さえられて阻まれる。

グレアムは気を失ったリインを抱だき抱かかえ、立ち上がる。いわゆる「お姫様抱っこ」だ。

「いつまでも応接間というのも何だな。そうだ君の部屋に行こう。君もこの様な場所で大人になるより、ベッドの上で大人になる方が良さだろう?」

「はい……」

はやては、グレアムに従うしかなかった。

第3章

1

リーゼアリアがはやての部屋のドアを開け、グレアムが先頭で入る。成人男性を自分の部屋に入れたのは初めてだ（ザフィーラは除く）。グレアムは、ラインフォースIIをベッドの端に寝かせると、着ていた服を全て脱ぎ、ベッドに座って足を開いた。

「さて、はやて君。暫く時間が経ったので、萎しぼんでしまった。まずは大きくしてくれないかね」

はやての身体がビクツと震える。グレアムの股の間には、だらんとぶら下がったペニスがある。これを再び反り立たせよ、と言うことだ。

「ね」

リーゼロツテが後押しする。はやては、おずおずとグレアムの前に行き、しゃがんだ。丁度グレアムのペニスが眼前に来る。

はやては、恐る恐るペニスに手を伸ばす。ペニスを見るのも、触れるのも当然初めてだ。ペニスを持ち上げると、先端に小さく血痕がある。ラインの処女膜が少し切れた跡だろう。量からして、完全に裂けた訳ではないようだが、ラインの事を想うと胸が痛い。

「何をしている？ さあ、嘗めたまえ」

グレアムに促つなされ、はやてはグレアムの亀頭を嘗め始める。ラインの血の味がする。

「さあ、もつと、もつとだ」

グレアムのペニスは、はやてのフェラにより段々と大きく固くなって来ているが、先端をちろちろと嘗めているだけでは、許して貰えない様だ。奥まで含んだり、横を嘗めたり、グレアムとリーゼの指導の元、段々と大胆なフェラになつていく。

「ぶぐっ!？」

はやてがグレアムのペニスを口の中に含んでいる時、自分の股間にも刺激を感じた。

「ただフェラするだけじゃつまらないだろ。サービスしてやるよ」

そう言つて、リーゼロツテがはやての股間をまさぐる。左手の指を膣に入れ、右手の指でクリトリスを刺激する。

「うっっ… ふ…ぐ…」

「いかな。どの様な時でも、口の動きを止めてはいけない」

自分への刺激に気を取られ、ペニスへの愛撫が疎かおろそになっていると、グレアムがはやての頭を押えて注意する。はやては、自分への刺激に耐えながらグレアムへのフェラを再開する。

そこに、さらにリーゼアリアが加わった。左手でははやての胸を揉み始める。右手の指で、膣から溢れている愛液を掬すくうと、はやてのアナルに指を添えた。

「んんんっ！」

今までと全然別種の刺激に、はやての身体が硬直する。リーゼロッテの刺激も激しさを増し、クリトリスを外と内の両方から刺激する。

「ぶふあっ！ あっ！ あっ!!」

はやては思わずペニスを口から吐き出し、その場に倒れ込む。ビクリ、ビクリと身体が大きく痙攣する。生まれて初めて絶頂を経験したようだ。

「全くしようがないな。私への奉仕を忘れ、自分だけ満足するとは」

グレアムは呆れて見せるが、はやてには聞こえていない。ハアハアと、肩で息をしているのみだ。

「さて……」

グレアムははやてのベッドに横になると、リーゼに目配せした。リーゼも了解し、はやての肩を持って、ゆっくりと立たせる。そして、グレアムの上まで連れてくる。

「もうそろそろ、大人になる儀式だ」

段々とはやてにも意識が戻り、グレアムのペニスが剥き出しなのに気づく。

「コ、コンドームは？」

「ゴム？ そのような無粋な物は不要だ。君も初めてが人工的で無機質な物質相手というのは嫌だろう」

「そんな……」

「そうか、分かった。リーゼ、リイン君を起こせ」

「な!？」

はやてはグレアムとリインを見る。生でしないと、再びリインが犯される。

「分かりました。このままで良いです」

「うむ、素直でよろしい。さあ、自分で入れるんだ」

はやては、右手でグレアムのペニスを持ち、腰を下ろす。亀頭が自分の膣口に触れる。しかし、そこで動きが止る。

自分の処女がこんな事で失われる。それもいつか現れる最愛の人ではなく、グレアムに。自分を援助し続けてきたのはこの為だったのか。これらの想いが湧き、悔しさと悲しさで涙が溢れる。

「ほら、早くしろよ。父様待ちくたびれてるだろ」

そう言つて、リーゼアリアがはよての腰を掴んで、落した。一瞬ではよての処女膜が裂け、亀頭が狭い腔空間を割り、英国人の長いペニスが子宮口をぐぬり押し上げる。

「おうっ」

思わずはよては口を押える。子宮という内臓を、強く突かれて押し動かされたのだ。身体の奥から吐気が込み上げる。

はよては暫く口を押えていたが、本当に吐くまでには至らなかったようだ。替わりに、段々と破瓜の痛みが湧いてくる。股が裂けている。そう感じた。破けた処女膜、一気に無理やりこじ開けられ、鋭く摩^すられた腔壁からの痛みだ。貫通時は痛覚のリミッターが作動して感じなかったものが、段々と感じられるようになって来たのだろう。戦闘で大怪我を負った時も、痛覚は後から襲ってきた。

「おめでとう、はよて君。これで君も大人の仲間入りだ」

「……」

はよては答えない。大人の仲間入りと言われても全然嬉しくない。

「どうした、動かないのか？」

はよては、ゆっくりと腰を持ち上げる。ペニスと、切れた処女膜が擦れて痛い。腰を上げ切ると、グレアムのペニス^{はす}が抜け、弾む。

「こら、何を抜いているんだ」

「で、でも痛いし、もう処女じゃなくなったし」

本当に大人にするだけが目的ならば、貫通だけで済む筈だ。

「大人への儀式はまだ始まったばかりだ。これだけではまだ本当に大人になったとは言えない」

「はい……」

その様に言われることは予想が付いていた。あわよくばここで終わるかと思つたが、やはりその様になることはなかったようだ。

はよては再び腰を下ろし、ペニスを握る。自分の愛液がまとわりついたためか、さっきよりもぬめりがある。恐る恐る、亀頭を再び自分の腔口にくつつける。痛みで顔をしかめる。グレアムを見ると、頷^{うなず}いている。このまま下ろせと言つことのようにだ。

はよてはゆっくりと腰を落としていく。自分の股が広がり、身体の奥に異物が侵入して来るのが分かる。抜く時と同様に、切れた処女膜と腔壁が傷む。さらに腰を落として、別種の痛みが身体のさらに奥から起こる。はよては、亀頭が子宮口まで到達したと思ひ、それ以上腰を下ろすのを止める。

そして、再び腰を上げる。この動作を何度も繰り返す。

痛みで息が荒くなり、脂汗が滲み出てくる。

「おお、いいぞ、はやて君」

グレアムの顔を見ると、そんなに気持ちいいのか、紅潮し、筋肉が緩んでいる。こんな男を気持ち良くさせるために、自分は痛みを耐えつつ、操を散らしているのかと思うと、屈辱で涙が出てくる。

「はやて君の中は狭くて、温かくて良いな。おや？ 全部入っていないではないか。そら」

「あう！」

そう言っ、はやてが腰を下ろしたタイミングを見計らい、グレアムは腰を突き上げた。ペニスが膣に全て入り、亀頭がはやての子宮口をカウンターで突く。はやてはそれにより生じた激痛で動きを止めた。体内は柔らかいのでグレアムのペニスを全て受け入れたが、激しく突かれた子宮口と、本来の位置から動かされた子宮が悲鳴を上げる。

はやてが耐えようのない痛みでじっとしていると、グレアムが腰を振り始めた。

「ははは、今度は私に動いて欲しいのかね？」

「あ、い、痛い。止めて下さい」

自分が動く、自分でタイミングが分かっているの痛みは小さい。しかし、グレアムが動く、そのタイミングが分からないので痛みが倍増する。

「痛い、動かないで。私が動きますから……」

「ははは、自分から腰を振るか。はやて君は淫乱だな。そんな風に育てた覚えはないぞ」

はやても育てられた覚えはない。グレアムの言動が理不尽さを増してくる。グレアムは腰を振りながら、上半身を起こし始めた。対面座位の格好で、はやてを抱き締める。

「はやて君は華奢だな。もっと食べなければ行かんぞ。でないとも胸も大きくなるらん」

そう言っ、グレアムははやての胸を揉み、クラスでも平均以下の胸を指摘する。普段は気にしていないが、言葉に出されると辛い。

2

「うっ、うっ、う……」

グレアムは、正常位ではやてを突き続けている。この行為が終わる気配はない。老人のために遅漏なのだ。長く続いていくために、痛みは大分薄れ、膣もペニスに馴染み、奥まで入れられても痛まなくなった。

「おう…… はやて君も大分良くなってきたな。儀式の最後も順調に迎えられるぞうだ」

「儀式の最後？」

「勿論、私を受け入れる事だ」

「……まさか、中に出すんですか!？」

はやての顔が青ざめる。

「何を驚いているのかね？ 生命本来の姿だ」

「い、嫌やつ！ それだけは、それだけは止めて下さい！

赤ちゃんできちまう！」

はやてが激しく暴れて抵抗する。

「ははは、この歳だ。子種はとづくに尽きているよ。調べたことはないがな」

「嫌あつ!!」

「嫌つ！ 嫌やつ」

「うん……」

意識がはつきりしない中、はやての声、いや、悲鳴が聞こえる。声ができる方を見ると、はやてにグレアムが覆い被さり、上下に動いている。はやては悲鳴を上げながら、グレアムから逃れようとじたばたしている。

「な、何してるんです？」

「おお、気がついたかね」

「リ、リイン!? 見たら、見たらあかん！」

グレアムはゆっくりと、はやては慌ててリインを見る。

「見たまえ。はやて君は大人になる儀式の最中なのだよ」

グレアムが大きく、ゆっくりと身体を起こす。そして、

グレアムのペニスが深々とはやてに突き刺さっている様を見せつける。

「ああ……」

はやては手で顔を掩おほう。自分のあられもない姿を見られること、幼いリインにこの様な行為を見られたこと、恥ずかしさ、悔しさ、様々な想いが過よぎる。

「ほら、私のペニスははやて君の中に入っているだろう」

グレアムはペニスをはやてに出し入れして見せた。

「ペニス？ おちんちんの事ですか？」

「その通りだ。リイン君は頭が良いな」

リインは褒められたが、何故か嬉しく思えない。それよりも、はやてが心配だ。

「はやて、泣いてるんですか？ 痛いんですか？」

リインは気を失う前の事を段々と思い出し、その時の状況を理解してきた。

「さつき痛かったの、これをリインに入れようとしたですか？」

「リイン君、君は優秀だ。その通りだよ」

「じゃあ、はやても痛いんですか？」

リインは心配してはやてを見る。

「さつきまでは痛がってたんだがね。もう慣れたようだ」
 そう言って、グレアムははやてのクリトリスをさする。
 はやての身体がビクビクと痙攣する。

「直にこの行為が快感となる」

「快感？」

「気持ち良くなると言うことだよ」

「あの痛いのが気持ち良くなるですか!？」

「その通りだ。現に私はとても気持ち良い。今すぐにも
 いつてしまいたいそうだ」

「だから、それはあかんて！」

はやてが再び慌て始める。

「精を受け入れる、それで大人への儀式は完了する」

「完了せんでええ！ 中には、中には出さんという！ お

願いやから外に出して！ 妊娠は嫌や!!」

はやてはグレアムを押しつけようとしますが、びくともし
 ない。

「妊娠って何ですか？」

「うむ、それはな……」

「リイン、それは後で教えるから！ 今は……!」

はやての嫌がる様子を見て、リインは決意する。

「グ、グレアム、私にするです！」

「何？」

「マイスターを守るのはデバイスの役目です！ その妊娠
 と言つのを私にするです!!」

「ふふ……」

グレアムは、リインの健気さと、「中出し」を「妊娠」と
 呼ぶ微笑^{ほほえ}ましさに笑みを浮かべる。

「君にかね？」

「そうです！」

「リイン、あかん！」

「マイスターはやて！ マイスターはリインが守るです！」
 リインの決意は固いようだ。

「しかし、私のペニスに君に入らなかったではないか」

「そ、それは……」

リインは、先程の激痛を思い出す。しかし、マイスター
 はやての為だ。

「はやての為に、リイン今度は頑張るです。痛いの我慢す
 るです！」

「ふむ。はやて君、君は良いデバイスを持った」

グレアムは満足げだ。この様な行為をしていても、はや
 ての成長を愛情を持って見守ってきたという自負があるの
 だろう。

「良かるう。リイン君、そこに四つん這いになりなさい。
 向こうを向いてな」

「はいです」

リインはグレアムの言うとおりにする。グレアムは、はやてからペニスを一旦抜いて、リインの下に近づく。

「駄目や！ リインには酷いことをせんといてー！」
はやてがグレアムに縋り付いて止める。

「君はリイン君の行為を無駄にする気かね」

そう言つて、グレアムははやてをリインの隣になぎ倒す。そのままはやての腰を掴んで引き上げ、尻を突き上げさせると、後ろから突っ込んだ。

「あぁっ！」

「おお、はやて君は後ろからも素晴らしい。」

「はやてに酷いことするなです！」

リインが抗議する。

「邪魔したお仕置きだよ。素直にしていれば何もしない。そうだ」

グレアムは身体を乗り出し、はやての耳元で囁く。

「はやて君、次の生理はいつかね？」

「な!？」

はやては、さらに顔が赤くなる。

「そ、そんな事……」

「言えないのか？ 恥ずかしいのか？ 既にこれだけの事をしている」

「……」

「もし危険日だったのなら、中に出すのを考えるのだがな」

「ほ、ほんまに？」

「ああ」

「……二週間後です。ちゃんと来るなら……」

はやては、俯きながら答える。男性に生理日を教えるのは恥ずかしいが、中に出されるよりはましだ。

「そうか、丁度危険日だな。それでは考慮しよう」

そう言つてグレアムはリインに右手を伸ばす。

「まずは指で試そう」

そう言つて、人差し指や中指でもなく、親指の、それも腹を突き出した。そして、愛液や唾液を付けて濡らした訳でもない、乾いたままの指をリインの膣口に押し付け、めり込ませる。

「ぎゃ〜！ 痛い！ 痛いです!!」

リインが泣き喚く。一番太い指で、しかも愛撫も何もして、乾ききっている膣壁を擦るのだ。その傷みは尋常ではない。

「やっぱり痛いです〜」

「これではやはり挿入は無理だな」

グレアムは人差し指の脇で外から、親指の腹で中からクリトリスを刺激する。横にずらしながら擦り、クリトリス

を覆っている皮が剥けて露出する。最も敏感な部分を、乾いた指でいきなり刺激され、快感ではなく苦痛が襲う。中と外、同時に苦痛を味わっていた。

「痛い、痛いです、止めてです〜」

「おお、ライン君は実に良い声で鳴く。それに中も温かく、狭く、吸い付いてくるようだ。ペニスを入れられないのが残念だよ。もし入れたら、さぞや素晴らしいのだからなあ」

「ライン… ごめん… 許して…」

グレアムが恍惚な表情をしている影で、はやては項垂れて、ラインに謝罪する。今のラインには何も聞こえないだろうが、それでも謝罪しないではいられない。

「もしペニスをライン君の中に入れたら… 入れたら… はああ……」

グレアムの表情筋が緩みまくる。そして、別の部分も緩んだ。

どく、どくどく……

快感は未だ感じない。痛みほとんど和らいだ。その為に、ペニスが自分の中でどの様に動いているのかよく分かる。膣壁を押し広げたり、擦ったり、子宮口を突いたり。

びく！ びくんびくんびくつ！

そして、ペニスの動きが変わったことに気づいた。今までと全く違う動きだ。いや、動きと言うよりは、痙攣・脈動している。

（まさか!?）

はやては振り向いてグレアムを見る。まるで天国にいるかのような表情だ。

「中に出してるの!？」

はやての顔から血の気が引く。

「嫌〜っ！ 抜いて！ お願い!!」

はやてはグレアムから逃れようと暴れるが、しっかりと腰を押さえられて、密着したまま離れることが出来ない。快感に酔いしれて力が抜けていても、精を子宮に送り込むという本能で、それを阻むための筋肉は働いているようだ。

「嘘つき！ 危険日なら出さないって……」
そして、次第にペニスの脈動が治まってくる。全ての精をはやての中に注ぎ込み終えたようだ。

「嫌あ、妊娠してまう…… えっ、えっ、えっ……」

グレアムはラインから指を抜いて、両手ではやての尻を掴む。ラインはその場に倒れ、ぐったりとしている。時折、下半身が痙攣している。



「いや、済まない。ライン君の中の感触と泣き声があまりにも素晴らしくてね。つい抜くの忘れてしまったよ」

(ラインの所為ですか……?)

ラインは、苦痛の余韻で意識が朦朧とする中、はやてが悲しんでいる原因が自分と言うことだけは、臆気ながら理解した。

「それに『考慮はする』と言ったが、本当に外に出すとは言っていない」

「そんな……」

はやては、悔しくて、悲しくて、さらに妊娠の恐怖で涙が溢れる。丁度危険日に出されたのだ。ただ出されるよりも、危険日であると告げられて出されたショックは大きい。

グレアムはゆっくりとはやての中からペニスを引き抜いた。その跡から、白い液体がどろりと零れ、はやての太股を伝う。その感触ははやても感じ取り、中に出されたという実感がさらに大きくなる。

「う、う、う、うえええ……」

涙が止めどなく流れて止まらない。

「こら、管理局のエースが泣いてはいかんじゃないか」
グレアムの言葉が、全て空虚で白々しく聞こえる。

「はやてちゃん、ラインの所為ですか？　ラインが、だらしなないから……」

ラインが、はやての元に這ってくる。はやてが泣いているのは、はやてが中出しされて泣いているのは自分の所為だと思いきみ、一緒に泣き始めた。

「ごめんなさい、ごめんなさいです……」

第4章

1

「何？ これ？」

「一体どういうことだ？」

ヴォルケンリッター
守護騎士の四人が、八神邸を囲う結界に見入る。普段は管理局から八神邸内に直接転移しているのだが、出来なかつた。そこで近くに転移して、様子を見に来たのだ。

アンチマジックフィールド
「A M F と物理障壁の二重結界、トリプルキAAA、いえ、Sクラスの魔導師かも……」

魔法攻撃も、剣による直接攻撃、メテオフォール岩石落下による間接攻撃も簡単には通じない。

「こんなの、思いつ切りぶつ飛ばせば良いんだよ！」

そう言っつて、ウィータはグラーファイゼンを構える。

「馬鹿！ 中の家や主まで吹っ飛ばさぞ」

「う……」

最大魔法・攻撃なら何とか結界を吹き飛ばせるかも知れ

ない。しかし、それだけの攻撃を行い、結界の消滅だけで済ます事は不可能に近い。必ず中の八神邸や、近所の街まで吹き飛ばしてしまう。

「シヤマル！」

「分かってるわ」

今取れる手段は、地道に結界解除コードを探すしかない。高度で、根気の要る作業だ。

「早くしろよ」

「黙ってて！」

シヤマルはウィータを怒鳴る。集中力の要る作業の上、焦っているのはシヤマルも一緒だった。

結界が急速に小さく、薄くなっていく。

「おおっ！」

「やるな、シヤマル」

「いいえ違うわ。まだ十分の一も解けていないもの」

「じゃあ、どうして？」

「それはいい。早く中に入ろう。主が心配だ」

詮索は後にして、八神邸の中に入る。玄関に近い部屋からはやてを捜す。さが応接間にも、台所にも誰もいない。次ははやての部屋だ。

「主！……!?」

「はやてちゃん！……!?」

シグナムがはやての部屋のドアを開け、中に入った所で、その光景に絶句して立ち止まる。シャルはシグナムが立ち止まったので中に入れず、ドアの所で部屋の様子を見て呆然とした。

「どうした？ シグナム、シャル？ はやて居たのか？」

ヴィータはシャルに阻まれて中に入れない。部屋のドアは二人通れる程大きくはない。ヴィータは飛び上がった中を見ようとするが、背が低いので見る事が出来ない。

「ヴィータちゃんは… そこにいて……」

シャルは、卒倒しそうになるのをどうにか堪えて、ドアを閉めた。

「おい！ どうしたんだよ！ はやて居たんだろ!? 入れろよ！」

ヴィータがドアを激しく叩くが、無視する。この光景は子供には見せられない。

はやてが全裸でベッドに寝ている。髪は乱れ、泣き腫らして隈が出来ている。何よりも、局部から太股にかけて、何か液体が流れ、そして固まったようなテカリがある。ベッドのシーツは乱れ、所々に血痕がある。リインフォースIIの姿は見えないが、デバイスが転がっている。

そしてベッドにはもう一人、大柄の老人、グレアムが泡を吹いて絶命していた。勿論全裸だ。その物体に二匹の猫が縋り付いて、「みゃーみゃー」と鳴いていた。

この場所で何が起こったのかは、容易に想像がついた。いや、とても想像したくない。

「ああ、はやてちゃん……」

シャルがその場でうずくまって泣き出した。シグナムは、寒くないよう、そして身体を隠すためにシーツを掛ける。そして、デバイスをはやての顔の側に置いた。

シャルは、シャルの肩に手をかけて励ます。

「堪える、シャル。我らが耐えねば、誰が主を支えるのだ」

「うん、うん……」

2

それからシグナムとシャルは、はやての身体を拭いて綺麗にし、服を着せた。グレアムの身体も同様にする。本当はグレアムの処理などしたくなかったが、今後の偽装のためには仕方ない。

はやてが目を覚まさないうちに、ヴィータやザフィーラへの説明も行った。ザフィーラは大人なので楽だったが、

ヴィータへの説明は困難を極めた。生きた年数は長くとも、性教育というものはされていなかったし、必要もなかった。迂濶うかつに説明すると、怒り狂ってグレアムの遺体を損傷させかねない。しかし、それをされては偽装に困る。

暫くして目を覚ましたはやては、シャマルの胸で泣いた。落ち着いた後、その後の方針が話し合われた。「グレアムがはやての卒業祝いに来て、心臓発作にて急死」と言うことで通すことになった。それにこの説明は、幾つかの事象が省略されているだけで、事実を曲げているわけではない。

グレアムの葬儀は、引退したとは言え元提督。また、身よりも無い為に管理局主催により行われた。引退の事情が事情なだけに、盛大には行われず、関係者だけの寂しい葬儀であった。

リーゼはグレアムからの魔力の供給停止と、死亡による契約解除により、素体の猫に戻っていた。人間体でいる間は若く見えたが、猫としては高齢。一時的に八神邸に引き取られていたが、程なく息絶えた。

はやては昼間・葬儀の間は毅然きげんと振る舞うことが出来たが、猫が近づいたり、夜になるとフラッシュバックに悩まされた。

リインフォースIIは、過度の肉体的苦痛と、はやてを守れなかった、はやてを余計に苦しめたという自責の念から、

暫く実体化する事はなかった。しかし、はやてがフラッシュバックを少しずつ克服するのと同時に、リインも心を開いていった。

全快はリインの方が早かった。中学卒業から一年、はやてには時折フラッシュバックが起こる。猫には触れないし、老人の男性も苦手になった。はやてが完全に回復する日は来るのだろうか？ 守護騎士達はその日が来る事を疑わない。

あとがき

皆さんこんにちは。PARALLEL ACT 主催者 TomOne です。つたない本を手にとってくださってありがとうございます。ご愛読ありがとうございます。

今回、割かし日程に余裕がありました。原稿はほぼ十二月上旬に出来、以前『マリみて』本で頼んでいた絵師も、自分の原稿が終ったとのことで、描いてくれました。彼は「エロ描けない」と言っていました、「ヌード」描いてくれました。

内容ですが、まずははやてを書きたいな〜と。で、ネタ考えてたらグレアムが浮かんで、ついでにリインも合わせて鬼畜な話に(爆) はやてと絡む男性キャラ少ないし。Stikersでは、ベルカ式魔導師の青年が出てくるので、ど

れだけ絡んでくれるか。

次のイベントは、来年五月のなのはオンリーを両方とも申し込む予定です。流石に新刊はどちらかで一冊でしょうけど。三月にマリみてオンリーがありますが、サークル参加はしないつもりです。今年沢山本を出したし、少し休みたいです。なにより、日常なネタが浮かばない…… いや、エロネタなら浮かぶんですが、マリみてでエロやる勇気が(爆)

二月のサンクリは、自分では参加せずに委託です。その後のサンクリは、自分で申し込むか委託かはまだ決めてませんが、何かしら出ていくと思います。それでは、またいつか。

'06年12月27日

TomOne

1975年6月28日、熊本生まれ。蟹座、O型。過去に『新世紀エヴァンゲリオン』『家なき子レミ』『救命戦士ナノセイバー』『学校の怪談』『天使のしっぽ』『電腦天使』『マリア様がみてる』『かしまし～ガールミーツガール～』の同人誌を発表する。

大人の階段

PARALLEL ACT SERIES

2006年 12月31日 第1版発行

定価はカバーに表示してありません

著者 TomOne
発行者 村上智一
発行所 PARALLEL ACT

URI <http://p-act.sakura.ne.jp/>
E-Mail tomone@p-act.sakura.ne.jp

印刷機 あなたのプリンタ

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替えいたします。まずは、当サークルにご連絡ください。
送料は当サークル負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもの、自ら印刷したものについてはお取り替え出来ません。

